

プレス空知 2020年1月

深井尚子

新年ということで、今月は、旅で出会った「ご縁」の広がりについてお話します。

もう、25年ほど前のことですが、日本の知人から、ヴェルツブルクにいる知人に渡してほしいものがあるといわれ、品物をお預かりしたことがあります。その時の渡航は、ウィーンで小さな演奏会があり、その後、先月お話したドイツのモーゼル地方でも演奏会があったため、その移動の途中で、ヴェルツブルクに寄って、その預かり物をお渡ししなければならぬということになっていました。自分の荷物だけでもドレスなどたくさんあり、さらに、ウィーンからモーゼルまで移動中の途中下車になるため、私にしますと、とても迷惑なお預かりものでした。本音は、お断りしたかったことを今でも思い出します。

ヴェルツブルクで初めてお会いした方は、なんと、17世紀に活躍した数学者、哲学者の、ゴットフリート・ライプニッツの直系のドイツ人の日本人の奥さまでした。お名前ももちろん、ライプニッツさんで、その旦那様は、普通の会社員でしたが、日本文化に造詣が深く、その地域の名士でした。そのため、「せっかくヴェルツブルクに来てくれたので、ここの文化人を紹介してあげよう。」と仰ってください、その関係で、シーボルト博物館館長と知り合うことになりました。シーボルトは、19世紀に日本に滞在し、日本文化をヨーロッパに紹介したことで有名な人物ですが、ヴェルツブルク出身で、ヴェルツブルクには、日本とヨーロッパの文化を融合したシーボルト博物館があります。そこには、100年前に作成されたグランドピアノが設置されていて、ほとんど放置された状態でした。そこで、私が演奏するということをきっかけに、そのピアノを修復して演奏会に使用できるようにしてくれました。このようにして、私は、シーボルト記念館と深い関りができ、それ以来、何度となく、ヴェルツブルクで演奏をするようになります。当初は、おつきあいで仕方なく立ち寄ったヴェルツブルクでしたが、これから、この関りは、長く続くことになり、結局、現在もヴェルツブルクは私の第3の故郷のようになっています。ちなみに第2の故郷はウィーンです。

このように、毎年、ヴェルツブルクで演奏をするようになるのですが、その時、ヨーロッパでも名の知れ渡った調律師、オルブリッヒさんとの出会いは、素晴らしいものでした。オルブリッヒさんは、当時、調律師の草分けといわれた方で、現在も調律技術に使われる、ハンマーに針を刺すというということを考案した方で、当時の日本人の調律師、郡司すみさんとの交流もあるとうかがい、ピアノ調律技術の潮流をも深く知ることになりました。オルブリッヒさんのお話は、次号に続きます。

ちなみに、ライプニッツさんの息子さんは、IT技術のスペシャリストとして大阪の研究所に所属し、大阪を起点に今も、世界中のIT技術に関わっています。